

# 森 鷗 外 「 堺 事 件 」

——その歴史性・文学性をめぐって——

岡 林 清 水

(教育学部国文学研究室)

## A Study of Ogai Mori's "Sakai Incident": with special referenee to the natures of history and literature

Kiyomi OKABAYASHI

(Department of Japanese Literature Faculty of Education)

### (一)

「土居盛義翁實傳」(明治三十七年十月十八日発行・編輯川谷正次)によれば、「五臺山下吸江之陽水蒼く氣清きの邊人目の集まる處一大碑のあるあり之れ即ち大島岬烈士殉難之碑となす吾人は杖を大島岬に曳き其碑に接する毎に烈士忠勇の跡を慕ひて感慨の情措く能はざるものあり」とある。いま、高知市の五台山麓吸江寺の前を過ぎ、大島岬にさしかかる手前の広場に至ると、その広場の隅に、記念碑が数基乱立しているのだが、そのなかに、慶応四年(1868)二月の堺事件の際に、泉州堺の妙國寺で切腹した土佐の十一烈士たちの烈士殉難の碑がある。明治二十九年(1896)三月に建てられたもので、陸軍中将従二位勲一等子爵谷干城の字で「烈士殉難碑」と題が記され、その後、漢文、書道をよくした海南学校教員西森真太郎(鉄研・1847~1918)の長い撰文がつづいている。成瀬温の字である。漢文で書かれているのだが、読み下してみると、このようになる。

明治元年二月二十三日我が藩隊長箕浦元章西邸氏同及び隊士若干人、界(堺・岡林注)妙國寺に自刃之を寶珠院に葬る。其の事壯烈傳ふべき也。是の時に當りて王師既に賊軍を破り錦旗東向して近畿の要衝亦兵を分ちて之を守る。而して堺は實に我が藩兵の守地たり。當時佛人頗る幕府に親昵し往往まさに事端を開かんとす。二月十五日佛人数十人大阪より界(堺)に趣き其の地理を探るに當り、我が兵之を大和川に要し、諭すに國法を以てす。彼辭屈して退く。既にして市民來り訴へて曰く、異人跋扈す。請ふ之を制せよと。蓋し海路短艇に乗りて來る者也。乃ち隊行を整へまさに捕へ其の無禮を糾さんとす。彼抗拒して從はず。紛擾の際一人隊旗を竊んで奔る。我が兵之を追ひて海に墜り、遂に之を奪還す。其の艇に在る者拳銃を亂發し我を禦ぐ。我亦十餘人を銃殺す。殘卒本艦に逃げ入れり。佛人怒り逼るに五事を以てす。隊長之を聞き奮うて曰く、我朝命を以て此の地を守り、以て非違を制す。制して聽かず、故に撃退す。果して非か、我輩二人の責のみ。士卒何ぞ罪あらん。朝廷勢の不可を察し、竟に其の請ふ所を容る。抽籤して死を二十人に賜ふ。此の日朝廷外務官及び佛國公使皆莅む。隊長以下自刃する者すでに十一人、其の舉止壯烈鬼神泣く。佛人戰栗正視する能はず。蒼黃として席を避け、官に其の死を止めんことを乞ふ。蓋し悔悟する所有る也。嗚呼烈士職司がために事に從ふ。理當然にして勢遂ぐべからず。理をまげて以て國に殉じ、外交以て全し。其の功宜しく百世に廟食すべし。而れども褒忠之典久しくて未だ聞かず。是れ志士仁人の深く痛歎する所也。土居君盛義亦二十士の一也。死友のために心力を盡くすこと十年猶一日のごとし。既に其の顛末を著はし以て天下に示す。又靖國神社に合祀されんことを請ふ。官未だ許さずと雖も、議院既に其の請を容る。輿論の歸する所、死者亦以て少しく慰むべし。このごろまさに碑を吸江大島岬に建て、以て忠魂を慰めんとす。來りて文を請ふ。

予敢へて辭せず。慨然筆を揮ひ、又其の姓名を碑陰に録し、永く不朽に垂れんとすと云ふ。銘に曰く、

熱血刃に<sup>も</sup>瀝ぐ 怒目光あり  
 光芒射すところ 佛人蒼黄  
 死以て國に報ゆ 芳名斯れ<sup>あが</sup>揚る  
 臺山の下 吸江の陽  
 魂魄 歸りて故郷を護る

明治二十九年歲次丙申春三月

土佐 西森真太郎 撰

東京 大城成瀬温 書

隊士屠服者姓名

大石良信 山本利雄 杉本義長

森本重政 稲田楨成 池上光則

勝賀瀬稠迅 北代正勝 柳瀬義好

建碑義捐者五名（省略）

上記の碑文中の傍線の箇所「蓋し悔悟する所有る也」は、必ずしもあたっているとはいえないが、その他は、まことに正確・簡潔に土佐的視点で堺事件なるものの経緯を叙述したものといえよう。この「烈士殉難碑」にのべられている如く、堺事件で生き残った土居八之助（盛義）は、明治二十六年（1893）十一月に、堺殉難烈士のため「烈舉實紀」（佐々木甲象著）一千部を自費を以て発行し、（参照、川谷正次「土居盛義翁實傳」明治三十七年十月十八日発行——明治二十六年十一月堺殉難烈士の爲め烈舉實記壹千部を自費を以て著發し弘く全國志士に頒つ——）ひろく全国有志にわかつと共に、明治二十八年十月堺殉難十一烈士の靈を靖国神社に合祀あらんことを帝国議會に請願した。この請願は、明治二十八年貴衆兩院を通過したが、時あたかも日清戦争後で外交問題の複雑なる時であったので、陸海軍において異論を生じ、決議がそのままに差し置かれることになった。

日清戦争の時、第一軍司令官・大本営監軍兼陸軍大臣をつとめたのは、長州出身の山県有朋であった。山県は明治二十二年には第一次の山県内閣を組織し、伊藤博文を継ぐ長州の権力者であった。谷・土方らは堺殉難烈士の靖国神社合祀を当分見送らざるを得なかった。このような状況のなかで、谷干城（谷泰山・谷垣守・谷好井・谷景井を経て谷干城に至る。干城は天保八年に生まれ、明治四十四年没す。その間、戊辰の戦役・西南戦争で勇名を馳せ陸軍中將となる。軍務を解かれてのち、学習院長・農商務大臣などを歴任した。）らの尽力もあって、堺殉難烈士の碑が五台山麓、吸江のほとりの大島岬に建つことになったものである。

堺の妙国寺の切腹で生き残った九名、橋詰愛平・岡崎栄兵衛・川谷銀太郎（土佐の幡多郡入田で病死）・武内民五郎・横田辰五郎・土居八之助（盛義）・垣内徳太郎・武内弥三郎・金田時治のなかの土居八之助盛義が中心となり、土佐出身の有力者谷干城・土方久元（泰山と号した。天保四年に生まれ、大正七年没す。その間、戊辰の戦役では関東監察使の軍監補助として三條美実に随行、明治二十年九月には宮内大臣に任ぜられ、樞密顧問官を兼ねた。三十一年辞職後は皇典研究所長、国学院大学長等を歴任した。）などと呼びかけ、堺の宝珠院の墓域改修・十一烈士の記念碑創建をはかる一方、佐々木甲象に資料を提供し、「烈舉實紀」一千部の著述を促し、その頒布に尽力したことであったが、さらに明治三十二年には「烈舉實紀」三千部を訂正増補再版「烈舉實紀」として増発したりした。

前記の川谷正次著「土居盛義翁實傳」によれば、土居盛義が堺殉難烈士のため、最初に谷干城に会ったのは、明治二十五年三月、谷が土佐に帰省したときであった。土佐郡久万にあった谷邸を叩き面会することができたので、堺事件の顛末を語り、靖国神社に合祭の恩典あらんことを請願した。

大いに感動した谷は、これより尽力する旨を告げたが、同年九月、再び帰省の際には自らその歎願書の文案を作り、顛末記とあわせて土居に渡した。明治二十五年十月、宮内大臣の土方久元が帰省した際には、面会の榮に浴し、土居は欣喜雀躍、拝謁し堺事件の事実を具申したところ、土方は、その当時の事を回想しながら深く感嘆し、「余また尽力すべし」と約し、堺事件実記出版の上は直ちに送本せよとはげましたことであった。

堺事件の際の六番隊長箕浦元章・八番隊長西村氏同は、いわば反板垣退助派であった。鳥羽・伏見の戦争の時、山路忠七・北村長兵衛の二隊は山内容堂の命を待たず、敵状偵察と称して勝手に伏見街道へ出張し、薩長二藩兵と共に砲火を放ち、幕軍を破ったが、箕浦・西村の二隊長は容堂の命を重んじ、ついにこの戦争には参加しなかった。戊辰戦役の際、東山道先鋒総督府参謀兼土佐藩兵総督板垣退助は、容堂の同意を得て軍隊を編制したが、平素板垣一派と意見の合わなかった箕浦と西村とは、その人選に漏れ住吉陣営詰を命ぜられた。板垣以下一千余人は、慶応四年(明治元年)二月十三日、天酒を賜い、翌十四日早朝、蛤御門より入って南門の前に整列し禁裏を伏し拝んで後、威風堂々、東山道に向かって出発したのだが、堺の大騒動はその翌日の十五日に突発した。(参照、「土佐傳説」昭和十四年一月十五日発行のなか「堺浦攘夷ノ顛末」川田瑞穂)

いわば、反板垣派の箕浦・西村両隊長に率いられた隊士たちの、堺において惹きおこした仏水兵殺害事件を、板垣派は心よく思っていなかった。土方久元・谷干城は、板垣・後藤を頭にいただく自由民権運動の外にあった人たちであった。明治二十二年、首相兼内相となった山縣有朋と維新の際には交わり(参照 土方久元「回天實記」)その後宮内大臣等を歴任した土方久元とか谷干城は、明治天皇側近の土佐の実力者であり、反板垣派であった。土居盛義は、この土方・谷を頼って、堺殉難十一烈士の顕彰をはかったのだが、この努力がみのって、ついに大正九年(1922)四月二十七日、十一烈士は靖国神社に合祀せられる事となった。

## (二)

以上、堺事件の概要および、堺事件その後の顕彰運動について述べてきたのだが、この堺事件を森鷗外は歴史小説としてとりあげ、「堺事件」と題して、大正三年(1914)二月一日「新小説」(春陽堂)に発表した。そして、同年十月二十三日「安井夫人」と合わせて単行本(「現代名作集」第二編鈴木三重吉編集)として発行になった。この鷗外の「堺事件」は、「歴史其儘」という原理が厳しく適用され、作者(鷗外)の主観的な解釈の投入や……作者(鷗外)自身の感想の表白などは完全に抑制され、そのために作の文体そのものもまた息づまるほどに冷徹な、非情とも言えるほどのときずまされた感じのものとなった。(講談社文庫「堺事件」解題・小堀桂一郎)と評価され、このような評価が、大岡昇平氏の場合——「森鷗外における切盛と捏造——『堺事件』をめぐる」(「世界」昭和五十年六月号)・「『堺事件』の構造——森鷗外における切盛と捏造——」(「世界」昭和五十年七月号)等で大岡氏は堺事件に関する諸史料をもとに、大岡氏なりの史実を明らかにして、歴史小説としての「堺事件」の欠陥性を指摘し、「烈舉實紀」との相違に関して、それは、当時の山縣体制に都合のよいようにした鷗外の捏造であると論じている。——を除き、鷗外の「堺事件」に対する一般的認識になっていたと思われる。

鷗外の一連の歴史小説——「興津彌五右衛門の遺書」・「阿部一族」・「佐橋甚五郎」・「護持院原の敵討」・「大鹽平八郎」・「堺事件」・「安井夫人」・「栗山大膳」・「山椒大夫」・「津下四郎左衛門」・「魚玄機」・「じいさんばあさん」・「最後の一句」・「高瀬舟」・「寒山拾得」・「澁江抽斎」——等のなかで、「堺事件」は、「歴史其儘」の代表作ということになっているが、実は鷗外にとって「堺事件」における「歴史」とは、佐々木甲象の「泉州堺土藩烈舉實紀」(発行者 土居盛義)に記された堺事件であったと考えてよかろう。(以下「泉州堺・土藩土」の角書きを省略)

して、単に「烈舉實紀」とよぶことにする。)

この「烈舉實紀」と、鷗外の「堺事件」との関連については、高知では早くからその密着性が指摘されていたのだが、中央でまとまった指摘をしたのは、稲垣達郎の「鷗外と『歴史其儘』——「堺事件」について——」(「日本古典新攷」早稲田大学文学部編東京堂刊、昭和十九年十月三十日)が最初であった。そして、二十年ほど後尾形仿の指摘を経て、大岡昇平の「堺事件」批判となって展開したものであった。この大岡昇平の発言に対して、すでに幾つかの所論が提示されている。蒲生哲郎の「『堺事件』論覚え書——大岡昇平氏の『堺事件』論をめぐって——」(「評言と構想」第五輯・昭和五十一年四月浅川書店)、吉田精一の「森鷗外は『体制イデオログ』か」(「本の本」・昭和五十一年十二月号株式会社ポナンザ)・谷沢永一の「鷗外・漱石への視角」(「国文学」・昭和五十二年三月月号学燈社)、小泉浩一郎の「『堺事件』再論——鷗外は体制イデオログか——」(「鷗外」二十一号・昭和五十二年七月森鷗外記念会)高橋正「森鷗外『堺事件』論ノート——大岡論文をめぐって——」(「日本文学研究」第十五号・昭和五十二年十二月高知日本文学研究会)等である。これらの諸家の所説は、それぞれ首肯すべきものをもっているのだが、拙稿では、従来の諸説の足らざるところを補うと共に、「堺事件」の背景追求を通して、その歴史性・文学性を明らかにしてみたい。

「烈舉實紀」の作者佐々木甲象は、弘化四年(1847)十一月、土佐藩士百々禮木の二男として高知城下帯屋町に生まれたが、のち佐々木家を継ぎ佐々木姓を名乗ったもので(明治二十三年四月)、「烈舉實紀」のほかに、「南山皇旗の魁」(明治十七年・のち明治二十四年「南海の勤王」となって出版)とか、「實説佐田廻野風」(明治十七年・号紅雨楼)などの作品がある。「汗血千里の駒」などの作者坂崎紫瀾は、この「實説佐田廻野風」に題辞を添えている。甲象は、宮崎夢柳・坂崎紫瀾上京後の高知の文壇における中心的存在であった。甲象は政治面でも活躍し、明治三十三年(1900)高知市会議員となり、青山茂明議長の下で明治三十七年まで副議長を勤め、その後上京した。

堺事件生き残りの土居八之助(盛義)は、高知市中島町四十三番屋敷に住んでいたが、同じく中島町七十五番屋敷の佐々木甲象が文学・政治両面で実力のあることを知っていたので、この佐々木甲象に乞い、堺事件顛末を記述せしめたのだが、この時、土居盛義は齢すでに七十歳を過ぎていた。漸く老境に入った土居盛義の余生をかけた情熱を、一杯に背にうけながら佐々木甲象は「烈舉實紀」を書きあげたのだが、これは、明治二十六年(1893)十一月に土居盛義の力で、出版になり頒布された。

その表紙は、「泉州堺土藩士烈舉實紀 全」と縦に記されたその左側に副題として、「妙國寺の切腹」と同じく縦に記されている。鷗外所蔵の「烈舉實紀」は、その表紙がどうしたことが消失し、あとで新に表紙を付け加えた時、内題の「泉州堺土藩士烈舉始末」の泉州だけを除き、「堺烈舉始末 全」と表題を書き記している。のちに、訂正増補再版(明治三十三年六月)も発行になったのだが、この表題は初版本(明治二十六年十一月)と同じく「泉州堺土藩士烈舉實紀」であり、副題も「妙國寺之切腹」となっている。(初版本では副題が「妙國寺の切腹」であるのに対し再版本では「妙國寺之切腹」となっている点と、右側に「訂正増補再版 佐々木甲象著」という文字が添加された違いがあるが、題名は初版本と全く同じである。)鷗外所蔵本のみを見て、「烈舉實紀」の初版本(明治二十六年版)の表題は「堺烈舉始末」と誤解している識者もいるが、これは訂正すべきである。

鷗外は、この「烈舉實紀」の初版本(明治二十六年版)をみながら、「堺事件」を書いたのだが、文語文と口語文との差異こそあれ、ほとんど「烈舉實紀」其儘といってよい。鷗外所蔵本の「烈舉實紀」の本文は、ほとんど全箇所が鷗外の引いた傍線だらけで、欄外には数か所書き込みもある。

(三)では、池上八十吉の欄外に「下ニ池上弥三吉トアリ」とあり、(五)では森下茂吉に対して

「前後森本トアリ」と書き込んでいる。(六)では武内民五郎に「竹内也」とあり、(七)では細川越中守・浅野少将に対して「細川越中守慶順ヨシユキ・浅野安藝守茂長」と記している。山川龜三郎に対して「上ニ太郎トアリ」とあり、潯源六に対しては、「落合也」とある。(八)では、妙国寺自刃の場を欄外に図示している。鷗外は、文語文で記した佐々木甲象の「烈舉實紀」を、いわば口語文に翻訳するような気持ちで、忠実に傍線を引いた「烈舉實紀」の本文を追って、叙述を進めていったのである。

鷗外の日記によれば、大正二年(1913)十二月七日に「大鹽平八郎を草し畢」り、十二月十一日に「小論文(岡林注、付録のこと)大鹽平八郎を書き畢」った鷗外は、多分その後で「堺事件」の執筆にかかり、十二月十六日「夜堺事件を書き畢」っているのも、比較的短期間で「堺事件」を書きあげたといえよう。

鷗外が「長宗我部信親<sup>ちようそがべ のぶちか</sup>」を書いたのは、明治三十六年九月のことだが、この時は、弘田長<sup>つかさ</sup>(1859～1928)の依頼により、これを書いたと述べている。弘田は安政六年六月、土佐の幡多郡下田村(現、中村市)に生まれ、明治十三年(1880)東京大学医学部を卒業した。鷗外より大学で一年先輩ということになるが、明治二十二年東京大学教授として小児科主任になり、同二十四年医学博士、同三十二年宮内省御用掛となった。大正十年(1921)大学並びに宮内省を辞し、昭和三年十一月没した。

この弘田の依頼に依り、鷗外は「長宗我部信親」(明治三十六年十月國光社発行)を作ったのだが、「長宗我部信親自註」(明治三十六年十月「萬年艸」巻第九)によれば、「此小叙事詩は、弘田長君の囑に依り、薩摩琵琶歌として作れるなり。……元親土佐ノ七郡を領す。彌三郎信親は元親の子なり。此篇は全く事實に據りて結撰す。一の虚構だに無し。而して其事實は主に谷子の所蔵寫本土佐國編年紀事略を取り。……」とある。谷子とは、勿論子爵谷干城のことで、父の名は万七景井、谷桑山の裔である。「土佐國編年紀事略<sup>とさのくにへんねんきじりやく</sup>」とは、土佐の神代から長宗我部氏の滅亡にいたるまでの政治・経済・文化・宗教等あらゆる分野の事柄を、年代順に記載し、そのよりどころとなった古文書・古記録の名を挙げるだけでなく、必要に応じて原文の一部又は全部を収めた歴史書で、中山巖水<sup>いずみ</sup>の手になるものである。巖水の死後、その子浄水の依頼を受けた寺村成相が筆写訂正を加え、谷干城の父景井の序文を添えて上梓されたが、原文は伝存せず、東京大学史料編纂所に写本がある。(「高知県歴史辞典」高知市民図書館刊 参照)

鷗外は、この「土佐國編年紀事略」によりながら、戦国時代に豊後の戸次川で島津の軍と戦って死没した長宗我部信親のことを叙事詩「長宗我部信親」にまとめたのだが、「堺事件」の場合は「烈舉實紀」を其儘使っているのである。鷗外は、佐々木甲象の「烈舉實紀」(初版本)に全面的によりかかっているのに、どこにも「烈舉實紀」を史料として使用したことを記していない。比較的短期間に「堺事件」を書きあげたため、「ことわり書き」を注する余裕がなかったのであろうか。それとも何か特別の事情があったであろうか。いずれにしても、全面的に「烈舉實紀」によりかかりながらも、一言もそのむねをことわってない鷗外の「堺事件」は、佐々木甲象が高知を中心としてかなり活発に文学活動を行っていたことを考えると、今なら「盗作」といわれても致し方のないようなものとなっている。

### (三)

鷗外の「堺事件」の書き出しは、「明治元年戊辰の歳正月、徳川慶喜……」で始まっているのだが、これは佐々木甲象の「烈舉實紀」の冒頭「明治元年戊辰正月徳川慶喜……」と全く同じである。結末も、「烈舉實紀」が、八番歩兵隊長西村左平次のあとつぎのことを記し、「左平次は子無きを以て祖父克平親族寛某を養子とし後其家を襲がしむと云ふ」で終わっているのに対し、鷗外の「堺

事件」も左平次のあとつぎのことを記し、「後には親族寛氏から養子が来た。小頭以下兵卒の子は、幼少でも大抵兵卒に抱へられて、成長した上で勤務した。」と記している。鷗外の「堺事件」の結び「小頭以下兵卒の子は、幼少でも……」の箇所は、「烈挙實紀」では少し前に、「小頭以下兵士の面々は實子幼少なも親規兵士等に抱へられ成長の後何れも勤務せり」と記しているのだが、それを鷗外は最後へ廻して、ほとんど字句はそのまま、順序を少しいれかえたのである。

事件の経緯の描写（筋）も、「烈挙實紀」で、（一）朝廷土藩に堺を警衛せしむ（二）佛人の横恣暴行 土藩警兵の砲撃（三）箕浦西村字和島侯へ届書を呈す（四）佛公使五條を要求して決行を逼る（五）抽籤を以て廿名の死生を定む 助命四士の友義（六）土藩二十士に死を賜ふ 十六士の激論（七）垣内怒て梵鐘を撞く 土居戯て柵中に入る（八）十一士妙國寺に自刃す 臨検佛人の逃走（九）佛人九士の助命を請ふ 橋詰愛平の義死（十）肥藝二藩士厚く九士を待つ 九士の特赦（十一）九士又流刊に處せらる 川谷配所に病歿す（十二）御即位に依て九士赦免せらる、に至るまでを叙しているのだが、鷗外の「堺事件」とはほぼ同じである。「鷗外全集」（昭和四年九月刊行、岩波書店）によると、鷗外の「堺事件」を、壹・貳・參・肆・伍に分けているので、この分類に従えば、「烈挙實紀」の（一）（二）が「堺事件」の壹、「烈挙實紀」の（三）（四）（五）（六）（七）が「堺事件」の貳、「烈挙實紀」の（八）（九）が「堺事件」の參、「烈挙實紀」の（十）（十一）（十二の一部分）が「堺事件」の肆、「烈挙實紀」の（十二の一部分）が「堺事件」の伍に該当している。

フランス側からつきつけられた五箇条の要求のうち、実行された三箇条のみを記したり、「定」「願書」「御沙汰書」などを省略したり、筋をいくらか簡約化した箇所はあるのだが、その叙述順序はまず同じといってよく、鷗外は「堺事件」を執筆するに当たって、「烈挙實紀」（初版本）を参考史料として準拠しただけでなく、側に置いて叙述を進めて行ったと考えられる。

表現の面でも、わかり難いことばをわかり易くおした面はあるが、ほとんど同じである。鷗外はかなり細かい点でも「烈挙實紀」に拠って書いている。堺事件の起こったのは、慶応四年二月のことであり、その九月に明治と改元されているので、一、二月の頃は慶応四年でよいはずだが、鷗外が「堺事件」の冒頭で、「明治元年戊辰の歳正月」としたのは、佐々木の「烈挙實紀」が「明治元年戊辰正月」と書いているのに拠ったもの——もっとも、一般的にも慶応四年を明治元年と記すことは数多い——と考えられる。鳥羽・伏見の戦いについても、「烈挙實紀」が「伏羽」と書いているのにそのまま準拠して、「伏見、鳥羽」と記している。鷗外が「堺事件」（壹）で、「フランス水兵の死者は總數十三人で、内一人が下士であつた。」と記したのも、「烈挙實紀」（二）で「佛人死する者十三名」、（四）で「佛國全權公使レオンロッシュは自國軍艦の海兵十三名堺港に於て土藩兵士の為めに銃殺せられたるを大に怒り」とあるによったものだが、実はフランス側の死者は十一名であつた。——現に、神戸再度山公園の外人墓地に、堺事件で死没した十一名の墓がある。その墓地の上手、中央に「デュプレ（DUPLEIX）号十一名の水兵たちの記念碑」が建ち、その碑の前に、チャールス・ピエール・ギーヨソー等少尉候補生（二十二歳）の墓がある。そして、その右左にそれぞれ五基ずつのフランス水兵の墓が縦に並んでいる。ヴィンセント・ブラール三等水兵（二十一歳）、ヌーフイル三等水兵（二十三歳）、ラヴヴィー三等水兵（二十三歳）、コンデット三等水兵（二十四歳）、アルセンフロリモンド・ヒューメー三等水兵（二十四歳）、ルムール等運転士（二十九歳）、オーガストルール・ランスネー三等水兵（二十二歳）、レザルスマリー・ボーブス三等水兵（二十二歳）、ピエールマリー・モデスト二等水兵（二十六歳）、ヴィクトル・グルナンベルジュ三等機関兵（二十四歳）の十名である。——葦頭梅吉を説明して、「堺事件」（壹）で、「江戸で火事があつて出掛けるのに、早足の馬の跡を一問とは後れぬといふ驅歩の達者である。」と書いているが、これはそのまま「烈挙實紀」（二）に「江戸に於て火災の際騎馬の疾

驅に隨行するに壹間を下らずと云ふ無雙の俠漢」とあるのによっている。また、その梅吉が、隊旗を奪って逃げて行くフランス水兵に追い付いて、「佛人が後より持たる鳶口風を切つて彼が頭腦に骨を碎<sup>ツブ</sup>ひて打込めば」と、「烈舉實紀」(二)にあるのを、「堺事件」(壹)では、「手に持った鳶口は風を切つて彼水兵の腦天に打ち<sup>うち</sup>卸された。」と、「風を切つて」などという表現字句は、そのまま使っている。その時、水兵の仆れるさまを、「烈舉實紀」では、「苦と叫んで仰さまに仆る」と表現しているが、「堺事件」では、「水兵は一聲叫んで仰向に倒れた。」と書いている。まず同じといってよい。「烈舉實紀」(三)の書き出しは、「二月十六日拂曉宇和島侯より土藩堺表取締を免ぜられ候條本日出張兵隊残らず引拂ひ可申旨御沙汰有之乃大軍監府は兩隊長に右の趣を相達し大坂藏屋敷迄引揚る様下知ありければ兩隊は速かに支度を了し隊伍整々と堺表を打立……」となっているのを、「堺事件」(貳)の冒頭では「十六日の拂曉に、外國事務係の沙汰で、土佐藩は堺表取締を免ぜられ、兵隊を引き拂ふことになった。軍監府はそれを取次いで、兩隊長に大坂藏屋敷へ引き上げることを命じた。兩隊長はすぐに支度して堺を立つた。」と、簡潔に三つの文にまとめているが、字句は同じである。そのすぐあとに「住吉街道を経て、大坂御池通六丁目の土佐藩なかし商の家に著いたのは、未の刻頃であつた。」(「堺事件」)と記しているのも、「烈舉實紀」に「住吉街道を経て其の日の未の刻大坂御池通六丁目なる我藩仲仕商の家に到着しける」とあるのを、そのまま使ったものである。「我藩仲仕商の家」(「烈舉實紀」)を「土佐藩なかし商の家」(「堺事件」)といい換えた程度のちがいはあっても、まず同じ表現といえよう。「烈舉實紀」(七)は、切腹の当日のことを叙し、「垣内怒て梵鐘を撞く 土居戯て櫃中に入る」というエピソードを書いているのだが、「堺事件」(貳)もまた、その通り書いていて、相違点もほとんどない。「尚ほ若干の時間あるとの事なれば二十士はいて此間に寺内を巡見せんとて共に庭前に立出て彼方是方と散歩するに此時土州義士の割腹するを見んとて堺市中は云ふに及ばず大坂住吉河内在等の人民聞傳へ先を争ふて寺内へ押掛ければ其混雜喧噪大方ならず」(「烈舉實紀」)を「二十人が暫く待つてゐると、細川藩士がまだなかなか時刻が來さうに無いと云つた。そこで寺内を見物しようと云ふ事になつた。庭へ出て見ると、寺の内外は非常な雜沓である。堺の市中は勿論、大阪、住吉、河内在等から見物人が入り込んで、いかに制しても立ち去らない。」(「堺事件」)と、いい換えている点でも明らかだが、文語表現を、平易な口語になおしてはいるが、まず同じ表現である。「烈舉實紀」(七)三十七頁に、細川藩隊長の名前が、二行目に「山川龜太郎」、七行目には「山川龜三郎」とあって違っていることに気づき、鷗外は、七行目の「山川龜三郎」の上欄に「上ニ太郎トアリ」と、所蔵本「烈舉實紀」に書き込んでいるが、結局、鷗外は「堺事件」で「龜太郎」の方を採って統一している。しかし、これは「龜三郎」の方が正しい。寺石正路著「明治元年土佐藩士堺烈舉」(昭和十二年宝文社)によると、この山川龜三郎という人は、徳富蘇峰の長姉の夫であつたらしい。このことを寺石氏に知らせた蘇峰からの書簡をそのまま前掲著書の序文に使っている。鷗外は、龜太郎をとるか龜三郎をとるかという籤引的な二者択一に、措しくもはずれたことになった。「烈舉實紀」(八)「十一士妙國寺に自刃す 臨檢佛人の逃走」は、堺事件のクライマックスというべき場面であるが、鷗外の「堺事件」は、「烈舉實紀」に従って書かれていて、相違点はほとんど無い。「堺事件」における箕浦元章切腹の場面の凄絶な描写は、軍医森林太郎・鷗外の冷徹な眼による凄さまじい描写力によるものかと感嘆するが、実はこれも「烈舉實紀」そのままである。「箕浦は事ともせず馬淵氏何とせられしぞ靜かに靜かにと聲掛けたり」(「烈舉實紀」)を、鷗外はどうしたことか間違えて、「『馬場君。どうした靜かに遺れ』と、箕浦が叫んだ。」(「堺事件」)と書き違えている箇所はあるが、他は全く同じである。「堺事件」で、「箕浦は衣服をくつろげ、短刀を逆手に取つて、左の脇腹に深く突き立て、三寸切り下げ、右へ引き廻して、又三寸切り上げた。刃が深く入つたので、創口は廣く開いた。箕浦は短刀を棄てて、右手を創に挿し込んで、大綱を攪んで引き出し

つつ、フランス人を睨み付けた。」とあるのは、「烈挙實紀」で「箕浦は徐かに衣を啓らき短刀逆手に取ると見べしが忽ち左の脇腹へ力を籠めて深く突立て三寸切り下げ右手へきりきりと引廻し又た三寸切り上げたりれば腹部口を開き進む血汐瀑の如し其時箕浦は隻手を腹中へ押入れ臓腑を掴んで引出し佛人を白眼みつ……」と、記しているのと同じ表現である。「短刀逆手」「左の脇腹へ……深く突立て」「三寸切り下げ」「右手へ……引廻し」「三寸切り上げ」「臓腑（大網）を掴んで引出し」「佛人を白眼（睨）みつ」等々、字句もまず同じといってよい。「烈挙實紀」で、「箕浦は忽ち大聲を放つて『まだ死なん切るべし切るべし』と叫びける其聲場内も崩るゝ斗遠く三丁の外に達す」と、かなり大袈裟に書いているにもかかわらず、鷗外もそのまま、「箕浦はまた大聲を放つて、『まだ死なんぞ、もつと切れ』と叫んだ。この聲は今までより大きく、三町位響いたのである。」と書いている。これは、字句表現の面でも、「堺事件」が「烈挙實紀」そのままであることを、よく示しているといえよう。「烈挙實紀」（九）「佛人九士の助命を請ふ 橋詰愛平の義死」の箇所も、鷗外はほとんどそのままに書いているが、（九）の後半はほとんど省略し、生運様（生きのこった九士）・御残念様（自刃した十一士）にまつわる話だけを採っている。そのなかで、十二人目に切腹することになっていた橋詰愛平が、同じく生き残ることになった外の八名と共に駕籠に乗ろうとする時、咄嗟的に自殺をはかる場面がある。なかなか緊迫した場面であるが、これを「烈挙實紀」では、「両藩士（藝州藩・肥後藩の藩士のこと、筆者注）列を正し人々を轎に乗せ已に立出でんとする折りしも愛平忽ち舌を噛み切り自から畢丸を絞り詰め一聲叫んで仆れければ」と書いている。ところが、あの冷徹な軍医的眼をもっているはずの鷗外が、「自から畢丸を絞り詰め」の字句だけを削除し、舌を噛み切ることによって自殺をはかったと記している。すなわち「堺事件」では、「一同駕籠に乗らうとする時、橋詰が自ら舌を噛み切つて、口角から血を流して倒れた。」と書いているが、これは美学的趣味からであろうか。「烈挙實紀」（十一）「九士又流刑に處せらる 川谷配所に病歿す」では、堺事件の生き残り九名の者が、御扶持切米召し放たれ、渡川限り西へ流罪となり、土佐の幡多郡入田村に住んだが、そのなかの川谷銀太郎が流謫地で病没し、「庄屋村人の力を仮り次の日遺骸を埋葬せしは實に明治元年九月五日のことなりける」と、記している。鷗外は「堺事件」（肆）で、この「烈挙實紀」により、「川谷一人は九月四日に二十六歳を一期として病死した。」と書いているが、幡多郡入田にある川谷銀太郎の墓石では、「慶應四年辰年九月五日行年二十六卒」となっている。

以上の、構成・叙述・表現を通しての比較考察によって明らかな如く、鷗外はいわば、佐々木甲象の「烈挙實紀」を歴史的事実と考え、「歴史其儘」に記述する態度で、「烈挙實紀」に基づいて歴史小説「堺事件」を書いたと思われる。つまり、鷗外の「堺事件」の歴史性とは、「烈挙實紀」其儘<sup>そのまま</sup>という盗作的性格をもつものであった。

#### （四）

ところが、この「堺事件」のなかで、鷗外が意識して「烈挙實紀」に拠っていない箇所がある。事件の経過も、表現、叙述、構成もほとんど佐々木甲象の「烈挙實紀」通りに書いているはずの鷗外が、どうしたとか、思い切って「烈挙實紀」の文章をカットしたり、筆を加えたりしているのである。

佐々木甲象は、土居盛義の依頼を受けて「烈挙實紀」のなかで、堺における土佐藩兵の愛国的行動とか、士族と軽格との封建的身分の問題、生と死との境における人間の極限的生きざまなどを取りあげながら、土佐藩兵のひきおこした堺事件なるものが、決して暴挙でなく、殉国の烈挙であり、切腹した十一烈士は靖国神社に合祀されるべきであるということを主張したかった（注）のである。

そのために、「烈挙實紀」では、堺事件の経過を精細に描写すると共に、土佐藩兵が堺の人たち



に好感をもたれていた——これは事実であり、今でも堺の人たちは好感をもっている——ことにしばしば言及し、「土藩鎮撫其の宜しきに適しければ人民何れも其の堵に安んじ其徳に懷つき……咸な相賀して云ふ我等今日あるは全く土藩の賜ものなりと酒肉を運び來りて兵士の勞を慰せんと請ふ者陸續絶へざりしとぞ亦た以て其の民望の歸する所を知るに足れり」(「烈舉實紀」(一))とか、「今迄守護神とも頼みつる市人等斯くと聞て甚と本意なきひを思なし余所なから兩隊の無難を心中に祈りつつ町外れ迄見送りし者も多かりしとぞ」(「烈舉實紀」(三))などと書いているが、鷗外は「堺事件」で、これらの箇所を全部削っただけでなく、佐々木甲象が書いていない「土佐の士卒は初からフランス人に對して悪感情を懷いてゐた。」(「堺事件」壹)とか、「攘夷はまだこの男の本領であつたのである。」という批判的ことばは書き加えている。切腹前の箕浦が、もともと応じて七絶「除却妖氛答國恩……」を書いたのに対して、鷗外は「攘夷はまだ……」と批判的ことばをいれているのだが、ここは「烈舉實紀」(七)では、「さらさらと辭世の一首を認めて差出せしは是ぞ今の世まで人口に膾炙する除却妖氛の詩にてありければ細川藩士は限りなく怡び相吟賞して其義膽と云ひ其才學と云ひ良に天晴の英士なりと嘆稱しけるとぞ」とある。土佐の箕浦が、「天晴の英士」と、細川藩士からはめられたという箇所は削っておいて、その代りに「攘夷はまだこの男の本領であつたのである。」という、鷗外の批判的ことばを加えている。同じく、「烈舉實紀」(七)で、「丈夫一死忠烈ならずば百年の壽も何かあらんと相談しつゝ快く盃を傾けゝれば兩藩士を始め手傳商人に到る迄倍々其の精神舉止を感嘆し又料紙硯持來り遺書遺稿を望み……」とあるを、鷗外は例のごとく、「兩藩士を始め手傳商人に到る迄倍々其の精神舉止を感嘆し」の箇所をカットし、「そこには細川、淺野兩藩で用意した酒肴が置き並べてある。給仕には町から手傳人が數十人來てゐる。一同挨拶して杯を舉げた。前に箕浦に詩を貰つた人を羨んで、兩藩の士卒が争つて詩歌を求め……」(「堺事件」貳)と書いている。「二十士は神色自若として平生の如く笑ひ語りて只顧最後の時刻を待居ける細川藩士熟々此の体を見て深く心に感じけん……」(「烈舉實紀」(七))の箇所も鷗外は、「細川藩士熟々此の体を見て深く心に感じ」たという字句は省略している。

「烈舉實紀」(第十二節まで八十三ページ、そのあとに「橋詰外七氏の略歴」・「箕浦西村の履歴附文詩歌尺牘」を付す)を「堺事件」という短篇(「新小説」二十七ページ分)にまとめようとした鷗外が、文章を簡潔にするために、「烈舉實紀」の一部を省略しなければならなかったことは当然うなずけることだし、いわゆる“傍觀者的立場”で歴史小説を書いた鷗外が、「烈舉實紀」にみられる「懷つく」とか、「嘆稱」「感嘆」といった感情的字句を含む箇所を削りとうとうとしたことも分かる。だが、そのあとへ「土佐の士卒は初めからフランス人に對して悪感情を懷いてゐた。」とか「攘夷はまだこの男の本領であつたのである。」と主觀的の字句を書き加えていることを考えてみると、土佐の二十士が堺の人たちや、細川・淺野兩藩士たちに好感をもたれていたということばをカットしたのは、鷗外が文章を簡潔にするためだったという、たんなる文章論とか、傍觀者的立場という解釈だけではすまされないものがあることに気づかざるを得ないのである。

箕浦元章は、土佐の箕浦学(箕浦泰泉・箕浦立斎・箕浦小石等)の家学を引き継ぐ男であり、鳥羽・伏見の戦いでも藩公の命を大切に、板垣のごとく時代の波に乗る行き方とは意見を異にする律義にして好學、覇氣にとむ男だったのである。当時の一般の日本人として当然のことながら、神国日本を侵犯する夷狄をうちはらおうとする気持ちは強かったが、決して鷗外に「攘夷はまだこの男の本領であつたのである。」と、軽く突き放されるような男ではなかった。六番隊長箕浦に対して、八番隊長西村氏同は、温厚篤実な男であり、当時の堺のこどもたちは、西村(二十四歳)を箕浦より大分年も老けていたように思っていたらしい。その追憶談に、「その時の土州の隊長は箕浦猪之吉といふ、年は二十六七であつたが、颯爽たる風貌の人物であり、副隊長の西村という老人と、よく宅へも來られたもので、私など、その箕浦さんに抱つこしたり、負んぶしたりしたものであつ

た。」(正木直彦「回顧七十年」昭和十二年四月、学校美術協会出版部発行)とある。この箕浦・西村にひきいられた土佐の藩兵たちを叙するに当たって、堺の人たちに好感をもたれていた点は全部ガットしておいて、「土佐の士卒は初めからフランス人に對して惡感情を懷いてゐた。」という鷗外の説明は、いわゆる「客觀的傍觀的立場」どころか、かなり主觀的見解の、強く表面に出たものといわざるを得ない。

(注) 佐々木甲象は「烈舉實紀」の緒言で「之を暴舉と謂ひ或は之を頑固と謂ふ既に當世に容られず空しく悲憤罔極の血涙を吞んで泉西鐵蕉寺(岡林注、妙国寺のこと)の裡に斃る爾來星霜を経る茲に廿有五年瘠骨枯朽して遺魂慰藉する所なく……今情當年の蹤を稽へ其事歴を探るに及んでや何ぞ知らん暴正曲直彼我全く顛倒し事情洵に歎慨に堪へざるものあるを……噫十一士の如きは則ち矯激に失せざるのみならず敢て其職を辱かしめず又其實を引き君國の爲め身を殺して以て禍亂の性機(訂正増補再版「烈舉實紀」明治三十三年六月発行の緒言では、「犠牲」となっている)に供せり亦殉國の烈舉と謂はざるを得ず……聖恩優渥苟くも丹心國家に存する者は其言動粗暴過激に涉りたる者と雖とも尚ほ且つ贈位を賜ひ或ひは靖國神社に合祭せられ百世に廟食するの榮を賜ふ而して獨り此十一士に於ては未だ至仁なる聖恩に浴する能はず……是乃ち余か淺嘗を顧りみず攷めて事實を質し以て烈舉の顛末を編著する所以也……」と、のべている。また、その凡例で、「本書は明治元年二月泉州堺に於て佛國海兵の暴横に方り土藩警兵之を砲撃せる前後の事蹟を叙述するものにして専はら土居八之助横田辰五郎二氏の實踐實記に據り間々他の公文史乘私記等を参照し二三論評を加へり……」と記している。

#### (五)

鷗外の歴史小説觀を示すものとして、よく引き合いに出されるのは、「大鹽平八郎」の「付録」である。そこには、次のように書かれている。

私は無遠慮に「大鹽平八郎」と題した一篇を書いた。それは中央公論に載せられた。

平八郎の暴動は天保八年二月十九日である。私は史實に推測を加へて、此二月十九日と云ふ一日の間の出來事を書いたのである。史實として時刻の考へられるものは、概ね左の通である。……(このあとに、時刻と事實を列挙しているが、省略岡林記す)

時刻の知れてゐるこれだけの事實の前後と中間とに、傳へられてゐる一日間の一切の事實を盛り込んで、矛盾が生じなければ、それで一切の事實が正確だと云ふことは證明せられぬまでも、記載の信用は可なり高まるわけである。私は敢へてそれを試みた。そして其間に推測を逞くしたには相違ないが、餘り暴力的な切盛や、人を馬鹿にした捏造はしなかった。

この「付録」は、大正二年十二月十一日脱稿し、大正三年一月「三田文學」第五卷第一号に掲載されたものだが、おそらく「付録」脱稿直後「堺事件」の筆を執り、その五日後の大正二年十二月十六日書きあげているので、「堺事件」は、いわば「付録」における声明とでもいうべき歴史小説觀によって書かれたと考えてよからう。たしかに「堺事件」は、「暴力的な切盛や、人を馬鹿にしたような捏造」のない作品であり、一応「歴史其儘」の作品だといえようが、その「歴史其儘」とは、「烈舉實紀」其儘であるということは、さきにすでに指摘した通りである。だが、そのなかに鷗外的主觀の入った切盛や取捨選択のあることも見逃すことはできない。

鷗外が歴史離れの志向を明らかにするのは、大正四年一月一日発行の「心の花」第十九卷第一号に発表した「歴史其儘と歴史離れ」という随筆においてであり、それには、「兎に角わたくしは歴史離れがしたさに山椒大夫を書いたのだが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れがし足りないやうである。これがわたくしの正直な告白である。」とある。

「堺事件」には、歴史其儘から歴史離れへ向かつて動こうとする鷗外をうかがうことができよう

が、この「歴史其儘」と「歴史離れ」との接点にあって、「其儘」と「離れ」とを結びつけているものは何であろうか。大岡昇平は、山県体制に奉仕する鷗外の思想的体質としての天皇至上主義、天皇絶対主義をあげているのだが、天皇至上（絶対）主義の点では、佐々木甲象の「烈挙實紀」と大差ないのである。

鷗外が「烈挙實紀」に即きながらも、「烈挙實紀」から離れているのは、「天皇至上（絶対）主義」というよりは、鷗外の「郷土意識」によるものであるように私には思われるのである。鷗外が死ぬ前（大正十一年七月）に遺言して、「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」といったことを思い合わせてみると、郷土意識的なものが手伝って、佐々木甲象が「烈挙實紀」のなかで土佐藩兵を称揚している箇所は、ことさらに削ったのだという解釈ができそうである。土佐の幡多郡具同の祭り相撲で、堺事件生運様のひとり川谷銀太郎が大阪関脇の大力士駒が岳を敗ったなどということも、佐々木は書きたいことだったが、鷗外にとっては不必要であったと思われる。全然書いていない。

土佐の人佐々木甲象は、土佐人的立場で堺事件を描写しているのだが、石見の人森鷗外は、佐々木の「烈挙實紀」に準拠しながらも、佐々木の土佐人的立場を意識的に離れようとしたのみならず、土佐人的あり方に批判を加えているのである。

大正二年の頃に、誰か高知県出身者から材料を提供され、執筆を依頼され、短期間に鷗外は「堺事件」を書きあげたのではないかとことも考えられるが、（篠原義彦「森鷗外の世界」昭和五十八年二月・桜楓社九十六ページ参照）この時期に依頼されたのであれば、<sup>訂正</sup>増補再版の「烈挙實紀」（明治三十三年六月発行）を鷗外は所蔵しているはずだが、鷗外所蔵本は、明治二十六年十一月出版の初版本「烈挙實紀」であり、表紙も欠けている。堺殉難烈士の顕彰と靖国神社合祀運動が、明治二十六年から明治二十九年へかけて盛りあがりを見せた時期に、宮内省関係の有力者、谷干城・土方久元などの縁故者から「烈挙實紀」（初版本）を、鷗外は手にしたことと思うが、堺烈士顕彰運動に一役買う気持ちは持てなかったであろう。

島崎藤村は「夜明け前」第二部上（昭和七年）第二章で堺事件にふれているが、それによれば、「泉州、堺港の旭茶屋に、暴動の起つたことが大阪へ知れたのは、異人屋敷ではこの馳走の最中であつた。餘程の騒動といふことで、佛國軍艦デュソレツキ號の乗組員が土佐の家中のものに襲はれたとの報知である。その乗組員は短艇を出して堺の港内を遊び廻つてゐたところ、俄かに土州兵のために岸から狙撃されたとのことであるが、旭茶屋方面から走つて来るものゝ進進もまちまちで、出來事の真相は判然しない。たゞ乗組員のうちの四人は即死し、七人は負傷し、別に七人は行方不明になつたといふことは確かめられた。」「申し上げます。明後二十三日には堺の妙國寺で、土佐の暴動人に切腹を言ひ付けるさうでございます。就きましては、佛蘭西側の被害者は、即死四人、手負七人、行方知れず七人でありましたから、土佐のものも二十人位で宜しからうといふことで、關係者二十人に切腹を言ひ付けるさうでございます。」（傍線岡林）などと記されている。藤村は、フランス的視野・立場で書いたものであり、堺における土佐の殉難烈士たちも、ここでは土佐の暴動人となっている。

與謝野晶子は「故郷」（初出・線と影・「三田文学」明治四十四年六月）という詩で、ふるさとへの哀愁の情にふれ、

堺の街の妙國寺  
その門前の庖丁屋の  
浅葱納簾の間から  
光る刃物のかなしさか

御寺の庭の堀の内

鳥の尾のよにやはらかな  
青い芽をふく蘇鉄をば  
立つて見上げたかなしさか

御堂の前の十の墓  
ふらんす船に斬り入った  
重い科ゆゑ死んだ人  
其の思出のかなしさか

いいえそれではありませぬ  
生れ故郷に來は來たが  
親の無い身は巡禮の  
さびしい氣持になりました

と、女性的にうたっている。この二篇のほかにも、堺事件を文学的にとりあげた作品には、井上笠園の「<sup>惨風</sup>妙國寺血潮の海」(大阪・積善館・明治二十六年六月)をはじめとし、大町桂月の「勇ましき切腹」(「学生」・大正三年五月)とか、中山義秀の「土佐兵の勇敢な話」(「群像」昭和四十年五月号)・司馬遼太郎「俄——浪華遊俠伝——」講談社・昭和四十一年七月)・上林曉「渡川畔の流刑地」(「文学散歩」十三号・昭和三十七年四月)・大仏次郎「天皇の世紀・第八巻」(朝日新聞社・昭和四十六年十一月)・中沢昭二「お残念さん・上・下」(おりじん書房・昭和五十二年四月・五月)・三好徹「叛骨の人」第二章(新潮社・昭和五十五年九月)中村吉磨(森三郎)の「堺騒動」(「赤い鳥」昭和七年十一月・十二月号・昭和八年一月号)、それに佐々木甲象の「烈舉實紀」と森鷗外の「堺事件」がある。

これらの、堺事件をとりあげた文学的諸作品のなかで、鷗外は、藤村のようなフランス的立場ではなく日本の立場で、晶子のような女性的立場ではなく土道的立場で、佐々木甲象のような土佐の立場ではなく岩見の立場で堺事件をとりあげ、史料的には全面的に佐々木甲象の「烈舉實紀」によりかかり、まず盗作といえるほど、構成・叙述・表現も「烈舉實紀」と同じでありながらも、土佐の顕彰精神を完全に捨てた立場で堺事件をとりあげ、「堺事件」を執筆したと考えてよからう。

明治四十三年(1910)五月に起こった幸徳秋水事件では、二十四名中、十二名が明治四十四年一月に処刑され、あとの十二名は特にゆるされ死刑をまぬがれた。堺事件によく似たケースである。大正元年(1912)九月十三日の乃木大將夫妻の殉死では、あらためて武士の自殺がクローズアップされた。鷗外は、土佐の人幸徳秋水事件から、かつて維新の際、堺において土佐人たちが惹き起こした堺事件を想い、乃木大將の殉死から、あらためて堺事件における切腹を回顧したと思われる。ここに至って鷗外は、岩見の人として、——ひいては長州的立場で——切腹の前後における人間の極限的状况を描こうとしたと考えることができよう。

堺事件における土佐の烈士たちの顕彰とか、靖国神社合祀へ向かっての運動を、鷗外はできれば避けたかったのである。谷干城・土方久元をはじめとし、田中光顯・佐々木高行・細川潤次郎等々、土佐出身の人々の、宮内省・学習院を中心とする勢力に、鷗外は表面から抗することはできなかったが、岩見の人として、長州の山県有朋の側にあるものとして、(明治維新前から岩見と長州とは勤皇倒幕運動のなかで提携してきた関係にある。)あまり積極的に土佐の顕彰運動の一翼をになうことは避けたかったと思われる。

「長宗我部信親」(明治三十六年九月)の時は、弘田長——前記(二)参照のこと——の依頼により書いたとか記しているのに、「堺事件」の場合は、何の説明もない。「烈舉實紀」提供者の名前とか、「烈舉實紀」入手経路などについて、少しは述べてもよいのではと思われるのに全然ふれ

ていない。鷗外所蔵本「烈舉實紀」の表紙が欠けているのも変である。何か書きこみのあった表紙を、ことさら除いたとも考えられる。

明治二十六年の頃から明治二十九年にかけて、土佐の人士居盛義翁を中心とする「堺殉難烈士」顕彰運動はクライマックスに達し、東京に居る谷干城・土方久元などの縁故を通して、森鷗外にまで及び、この頃「烈舉實紀」も鷗外の手には達したと思われるのだが、鷗外は動かなかった。

堺殉難烈士顕彰運動の、東京における中心的人物谷干城は、明治四十四年五月十三日になくなったのだが、幸徳秋水事件、乃木大將の殉死などを経て鷗外は、堺殉難烈士顕彰運動とは全く離れた立場で、堺事件を書く気持ちになったのではないかと考えられる。

谷干城は海南古狂の号で「烈舉實紀」に漢文の序文を寄せているが、これを読み下してみると、「其ノ狂暴ヲ座視スレバ則チ士道ヲ汚シ職分ヲ辱シムルノ罪死ニ當ル也。其ノ狂暴ヲ懲戒スレバ則チ廟堂懷柔之策ト違ヒ亦死ニ當ル也。均シク皆死ナリ。士道ヲ汚シ職分ヲ辱シメテ死スルト、士道ヲ守リ職分ヲ盡シテ死スルト、孰レカ是ニシテ孰レカ非ナルヤ。只我が海南男兒、善ク之ヲ辨ズ。土居翁盛義ナル者ハ情ニ厚キノ士也。深く界殉難ノ事ヲ哀レミ、佐々木甲象ニ乞ヒテ其ノ顛末ヲ録シ、將ニ以テ不朽ニ傳ヘントシ、来リテ一言ヲ乞フ。乃チ七言絶句ヲ賦シ、其ノ卷首ニ書シテ曰ク攘夷ノ詔勅、耳マサニ熟ス。何ゾ料ランヤ廟謨早ステニ遷ル。暴ヲ禦ギ狂ヲ懲シテ身却テ死ス。長シヘニ志士ヲシテ涙潜然タラシム。 明治二十六年九月 海南古狂于題」となる。

鷗外は、「烈舉實紀」によりかかりながらも、この谷干城の序文にあらわれているような、いわば土佐の国粹的見解に反撥して、「烈舉實紀」離れをみせている点がある。鷗外が「堺事件」(貳)で、箕浦の七絶「除卻妖氛答國恩。決然豈可省人言。唯教(「烈舉實紀」の冒頭では、「唯令……」とある)大義傳千載。一死元來不足論。」をあげた後に、「攘夷はまだこの男の本領であつたのである。」と批判的ことばを記したのは、その底流に、谷干城の序文ならびに七絶への反撥もうかがえるものである。

鷗外が土佐の立場に反撥した時、それはたんなる客観的立場ではなく、その底に岩見の立場が存在していたことを見逃してはなるまい。鷗外の遺言における「余ハ石見国森林太郎トシテ死セント欲ス」とは、たんに「肩書きのない一人間森林太郎として死にたい」というだけでなく、石見の国への風土的郷愁のあることも看過してはなるまい。

鷗外は、岩見の立場で——西周の文化的立場と、長州の実力者山県有朋などとつながる長州的立場をも含んだものだが——土佐の藩兵の堺における壮烈な切腹の場面を中心に、人間の極限状況を取りあげて、日本人の根源的・伝統的あり方にふれようとしたのである。この鷗外の岩見の立場に立つ批判的姿勢は、洗練された現代口語、冷徹なまでにとぎすまされた文体と共に、鷗外の「堺事件」の文学性をつくりあげているといえよう。(注)

佐々木甲象の「烈舉實紀」其儘の「堺事件」が、時に「烈舉實紀」から岩見の立場で離れたとき、そこに「堺事件」の歴史性と文学性とは併存することになるのである。

(注)「堺事件」(現代名作集)第二編の序で鈴木三重吉は、鷗外の「堺事件」の部類の作物は、古來の傳説・史實・物語に新しき生命を盛った作品で、「莊重な純正な筆致を以て、複雑したる實を快明と潤澤とを供へて藝術化せられたる」ものであるとのべ、莊重・純正な筆致と新鮮、快明、史潤澤の作風をあげて、鷗外の文学性にふれている。

附記 拙稿は、昭和五十五年十一月、日本教育大学協会四国地区研究集会在高知大学教育学部で行われた際に発表したものを、一部引用したことをお断りしておきます。

(昭和59年9月30日受理)

(昭和60年3月9日発行)

